

## Ⅱ. 縄文時代

縄文時代の遺構としては煙道付炉穴(えんどうつきろあな)、石囲炉をもつ竪穴住居、陥穴(おとしあな)があります。煙道付炉穴は縄文時代早期(約9000年前)に多くみられ、狩りによって得たイノシシなどの獲物を燻製にするための施設と考えられます。石囲炉は拳大の礫を長方形に並べており、炉の近くからは縄文時代中期(約4000年前)の土器が出土しました。炉の周囲は楕円形に窪み、住居の範囲がよくわかります。陥穴は北側斜面部に多数掘られています。なかには底に小さな穴があいているものがあり、これは逆茂木(さかもぎ→トゲのある枝木や先端を尖らせた枝木を立てたもの)の跡と考えられ、穴におちた獲物がこれに刺さるようなくみになっていたようです。

主な遺物としては縄文土器の他に石鏃(せきぞく)、尖頭器(せんとうき)、打製石斧(だせいせきふ)、石匙(いしさじ)、石棒が出土しています。



⑨ 陥穴 (縄文時代)



⑩ 煙道付炉穴 (縄文時代早期)



⑪ 竪穴住居 (縄文時代中期)



⑫ 石棒 (縄文時代晩期)



⑬ 大溝 (古代以降)



⑭ 炭焼窯 (近世)

## Ⅲ. 古代以降

古代以降の時期につくられた遺構としては、調査区を東西に走る大溝、北側斜面部に存在する中世の竪穴状遺構と火葬骨を伴う土抗、近世以降につくられた炭焼窯があります。

大溝は底が平らに掘られており、部分的に土橋状の掘り残しがみられます。この溝は弥生時代後期～古墳時代前期の住居を壊してつくられていることから、集落よりも新しい時期の遺構と考えられます。溝の性格としては、この遺跡の南側に隣接する式内社石座神社の社地を区画するためのものである可能性が考えられます。

## Ⅳ. まとめ

今回の調査では、大型竪穴住居や大型掘立柱建物という集落の中心施設の様相が明らかになり、さらに破鏡の出土や金属器生産の痕跡といった多くの成果を得ることができました。弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、この石座神社遺跡は東三河における拠点的な集落であり、同一丘陵上に存在する断上山10号墳(前方後方墳、全長50m)に対応する首長居館を擁していたと考えられます。

今年度は調査区をさらに東に移して調査を続けます。北側斜面部が東に回りこむため、竪穴住居が密に確認された丘陵頂部の平坦面はあとわずかです。次はどのような遺構・遺物がみつかるのでしょうか。今後の成果にもご期待ください。

2010年度

# 石座神社遺跡 現地説明会資料

石座神社遺跡は新城市大宮に所在する、弥生時代後期～古墳時代前期(西暦2～3世紀)の集落遺跡です。豊川中流域右岸、連吾川と大宮川に挟まれた標高約110mの上位段丘面上に立地しており、低地との比高は20～30mです。発掘調査は新東名高速道路建設に伴う事前調査で、平成20年度から継続して実施しています。昨年度までは丘陵端部の調査を進めてきましたが、今年度は丘陵の頂部に広がる広大な平坦面を主に調査しています。

調査の結果、丘陵の頂部には集落の中心施設である大型の竪穴住居や掘立柱建物が集中していることが明らかになりました。また三河では初であり、愛知県では3例目となる中国鏡の破鏡が出土したことも注目されます。本日は今年度調査区の約半分、A区としている約6000㎡の調査成果を皆様にお知らせいたします。



A区中央部竪穴住居群

2010年11月23日(火)

主催:愛知県埋蔵文化財センター

支援:株式会社 島田組

# I. 弥生時代後期～古墳時代前期

石座神社遺跡の主な遺構は弥生時代後期～古墳時代前期(2～3世紀頃)につくられた竪穴住居と掘立柱建物(ほったてばしらたてもの)です。竪穴住居はA区である約6000㎡において、約170棟もの数が確認されました。建て替えや拡張を繰り返しており、多いところでは7棟もの住居が重なり合うような状態で確認されています。住居1棟あたりの規模は、約3m四方の小型のものから、約9m四方の大型のものまで大小さまざまです。大型住居のなかには壁面に細い柱穴が巡るものがあり、つくられた当時は壁立ち式の立派な建物であったと想定されます。このような壁立ち式の大型住居は、集落の中でも特に身分の高い人物の居宅であったと考えられます。

掘立柱建物は10棟以上が確認されています。そのうち長辺約7m×短辺約5mの大型のものは、長辺の一方に布掘り溝と呼ばれる溝を掘り、そのなかに柱を据えています。

今回出土した遺物で最も注目されるものは破鏡です。約4.2m四方の焼失住居から出土しました。また、壺・甕・高杯(たかつき)といった土器と共に、鉄剣、板状鉄斧(いたじょうてつぶ)や鉄ヤリガンナ等の鉄製品も出土しています。さらに銅滴(どうてき)や板状の青銅製品(銅鐸のかけら?)が出土したことから、青銅製品の铸造が行われていた可能性が考えられます。



中世の竪穴状遺構



⑥焼失住居

床面に炭となった住居の部材と廃棄された土器が残っていました。

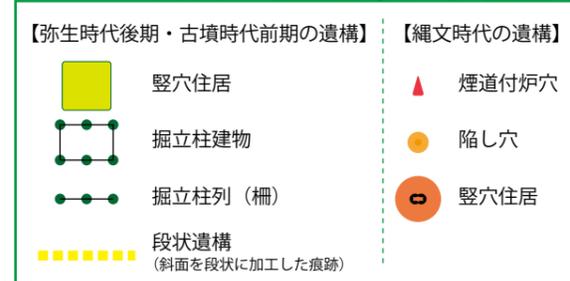
⑦鉄ヤリガンナ  
住居内から出土しました。建築部材の表面仕上げを行うための大工道具です。



⑧竪穴住居内出土土器



①破鏡(方格規矩四神鏡)



2009年度調査区

2010年度調査区

未調査部分(今年度調査分)



②布掘り柱掘方をもつ大型掘立柱建物

西側長辺(向かって左)の柱は溝の中に据えられていました。



③竪穴住居群

さまざまな大きさの竪穴住居が重なり合うような状態で確認されました。



④壁立ち式の大型竪穴住居

1辺約9mの大型住居です。壁沿いに約1.5m間隔で柱穴があります。



⑤板状鉄斧(いたじょうてつぶ)

竪穴住居の調査中に出土しました。鉄でつくられた斧の一部です。

## 石座神社 (いわくらじんじや) 遺跡出土破鏡 (はきょう) の概要

### 1 名称

破鏡 (はきょう)、鏡式は方格規矩四神鏡 (ほうかくきくしんきょう)。

### 2 製作地・製作年代

中国後漢代初期、紀元後1世紀半ば頃

### 3 大きさと形状

鏡は約2cm四方に分割され、周囲はよく研磨されています。また、紐を通すための孔が2カ所に空けられています。厚さ約1mm。類似した鏡の例から、分割される前の鏡の大きさは径17～18cmと思われます。

### 4 材質

銅合金の一種である青銅 (銅、錫、鉛の合金) 製品。全体に黒みを帯びることから、良質な原料を使用していると思われます。

### 5 文字と文様について

方格規矩四神鏡とは、中央の方格内に記された十二支による四至を玄武、青龍、朱雀、白虎の四神が守護するという観念を表す鏡です。

石座神社遺跡出土破鏡の鏡背 (文様を鋳出した面) には、「泉」の文字が認められます。この文字は、「尚方作鏡真大巧 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食棗 (尚方が作った鏡は大きく精巧で、天には仙人がいて老いを知らず、渴せば玉泉を飲み飢えれば棗を食す)」と記した銘文中の一字と思われます。この銘文は方格規矩四神鏡によく用いられます。

銘文との位置関係をも参考にすると、残存する文様は右向きの白虎の一部と考えられます。使用期間が長期間に及んだためか、文様は不鮮明になっていますが、左から白虎の尾、後足、胴体、羽、首、前足の表現が確認できます。

### 6 出土状況

破鏡は南西向きの緩斜面に面した竪穴住居の埋土から出土しました。竪穴住居の大きさは約4.2m四方で、竪穴住居の床面付近には炭化した木材が多く残されていました。破鏡は竪穴住居が廃絶する際に投棄されたか、埋没する過程で埋まったものと思われます。竪穴住居から出土した土器などから、破鏡が投棄された (埋まった) のは3世紀頃と考えられます。

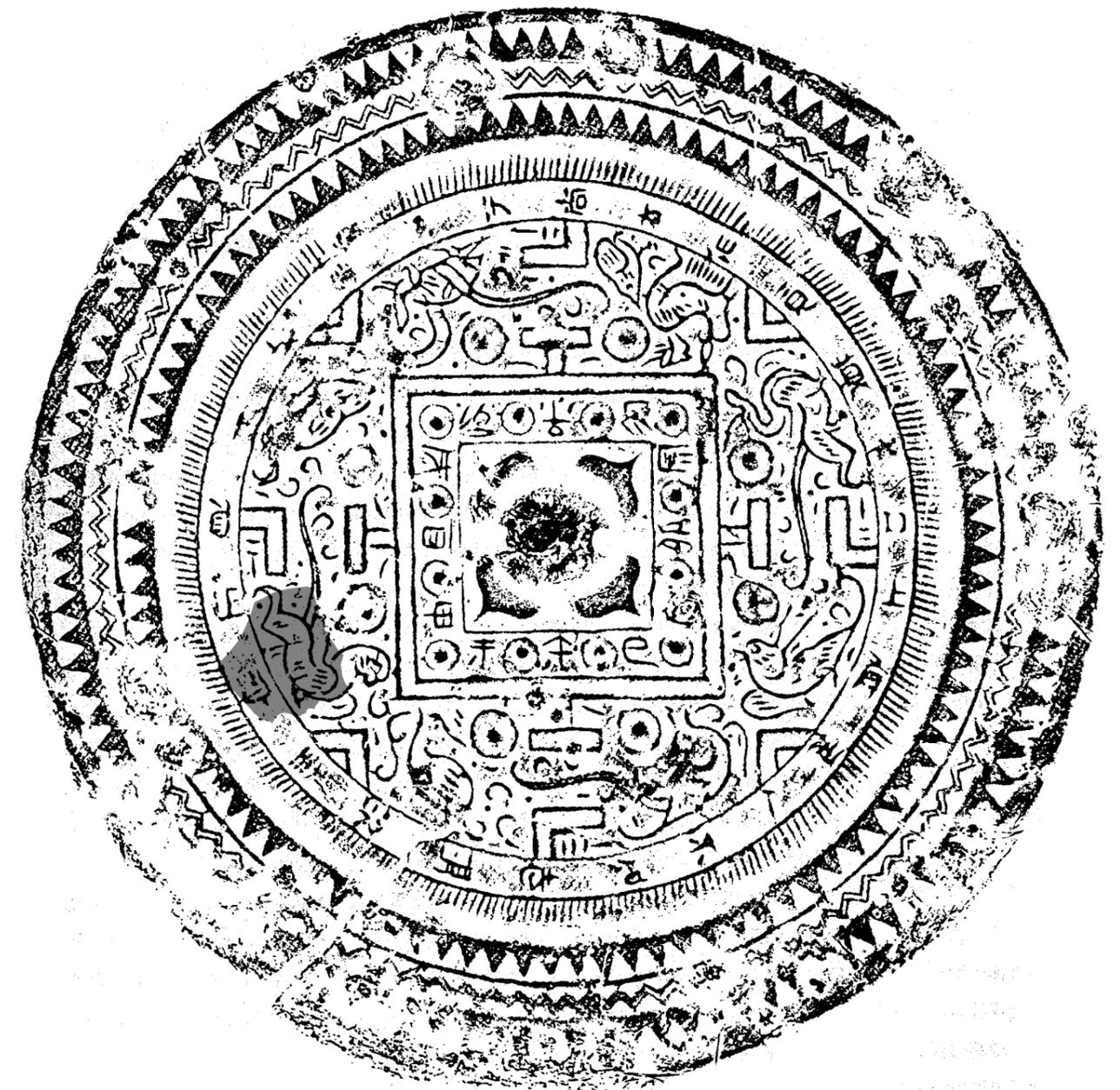
### 7 意義

県内では、名古屋市高蔵遺跡の虺龍文鏡 (破鏡)、清須市朝日遺跡の虺龍文鏡 (破鏡) に次ぐ古い鏡です。両遺跡は県内屈指の弥生時代の集落遺跡です。また、東日本の集落遺跡から出土した中国鏡としても数少ない貴重な例です。このことから石座神社遺跡は、当時、希少価値が高かった中国鏡を入手することが可能な有力な集落であったと考えられます。



石座神社遺跡出土破鏡 (1:1)

文様詳細 (復原)



石川県宿東山1号墳出土鏡 (1:1) と石座神社遺跡出土破鏡の推定位置 (灰色部分)